

## 【論文】

# 明治後期における西洋笑話と英語学習書

浦 和 男

## Western Pleasantries and English Learning Books in the Latter Half of the Meiji Era.

URA-MIYASAKO, Kazuo

**要旨:** 文明開化とともに西洋の笑話が原文で紹介されるようになる。新聞、雑誌類では明治10年以降の掲載が確認され、明治25年には福沢諭吉が「開口笑話」を出版し約350篇の笑話を紹介した。明治30年代後半になり、西洋の笑話を利用した英語学習書が相次いで出版され、英語読本類にも笑話が掲載される。その背景には、明治20年代後半からの英語教育の普及と産業発展による英語ブームと、文法に重点を置かない実用英語指向の高まりがある。また、この時期には新しい「笑い」を求める雰囲気があり、西洋の笑話の英語学習への利用が高まったとも考えられる。原文による笑話の学習を通じて、明治期の読者は多文化に接触し、日欧に共通する笑いの存在を知ること、日本人が異質ではないことを知ることができた。これらの英語学習書の英語教育的な意義、扱われた西欧笑話の日本の笑いへの定着、近代文学への影響など、今後検討しなければならない問題は多く残されている。

**キーワード:** 英学史、英語教育史、多文化理解、明治文化、笑い

### 1. はじめに<sup>(註1)</sup>

明治25年(1892年)9月、福沢諭吉と長男一太郎によって出版された「開口笑話」(Pleasantries Done from English into Japanese)<sup>(註2)</sup>は、日本における本格的な英和对訳の笑話集の嚆矢として高く評価されている。全351篇(格

言的なもの20篇、早口言葉2篇を含む)<sup>(註3)</sup>を収める英和对訳の笑話集は今日にも類がなく、画期的な書物であることはまちがいない。

福沢は「序」で、「教育の目的は唯才徳の発達を促すに外ならざれども其方法は千差万別際限ある可からず就中奇言を放て人の好奇心に投げ一笑の間に無限の意を寓して自ら人情世態の裡面を会心せしむるが如きは教育法の捷徑にして却て有力なるものあるが如し。」と論じ、教育に於ける笑いの効用を説いているが、これもまた教育方法においては画期的な発言であった。この意見が1910年から1940年に刊行された尋常小学校国語読本の笑話の採録に影響を与えた可能性を長島平洋は論じ<sup>(註4)</sup>、対訳の笑話集という発想が英語学習にも新しい一面を投げかけたことをロン・スチュアートが指摘している<sup>(註5)</sup>。

英和对訳による笑話の紹介は、すでに当時の新聞、雑誌などで試みられている。明治期を代表するユーモア雑誌「团团珍聞」は明治10年(1877年)の創刊号から英語対訳欄を掲載し、早くから笑話を紹介している。「狂画(わらいえ)」「風刺一コマ漫画」のキャプションの一部にも英文の対訳あるいは要約を添えている。創刊号(明治10年3月14日発行)の「英和对訳(English-Japanese Dialogue)」には、「团团珍聞」の趣向がこれまでの新聞とは異なるという内容が説明され、「和英会話ノ部ガアリテ英学スル日本人モ日本語ヲ習フ外国人ニモ屹度(キット)益(タメ)ニ成リマス。」という一文がある。そして、「和英会話ノ部」には時事的、政治的な内容に加え「隠話(ナゾ)ヤ諧謔(オドケバナシ)ヲ付ル積リナリ。」と書かれている<sup>(註6)</sup>。

「英学」学習に「諧謔(オドケバナシ)」、つまり笑話を使用するという試みの最も早い発言である<sup>(註7)</sup>。

福沢の編輯になる「時事新報」では明治19年(1886年)頃から対訳笑話を掲載した。福沢は「序」で「開口笑話」の英語学習面での機能に言及はしていないが、「時事新報」の1982年10月18日号広告には、「右は時事新報紙上に掲載発兌したる短英語中その最も絶妙なるものを抜粋し便覧の爲め集めて一冊に再版したるもの。此書を一読すれば人事無限の機轉に益する

にと大なるのみならず英和の対訳文は以て英語を学ぶの一助として其効少なからざるべし。」と笑話を利用する英語学習書を強調している。

その後、明治後期に次々と英語笑話あるいはそれに類するものを集めた独習用の学習書が刊行される。量的に福沢の「開口笑話」に匹敵する書は刊行されていないとはいえ、それぞれ特徴のある編集がなされている。

これらの英語学習書は、明治期の英語教育史のみならず、日本における西洋笑話の移入、日本人のユーモア観への影響、明治期の多文化理解、など、さまざまな領域での史料となりうるにもかかわらず、福沢以外の書籍についてはほとんど注目されず、体系的な研究は皆無であった。

本稿では、これまでに確認できた福沢以降明治末までの西洋笑話類を使用した英語学習書を紹介し、その出版の時代的背景、掲載された笑話、笑話集として果たした役割について考察する。新聞、雑誌での対訳笑話については改めて考察を行い、将来体系的な分析を試みたい<sup>(註8)</sup>。

## 2 笑話を利用した英語学習書

これまでに確認できた学習書30冊の書誌情報と、未確認3冊の情報を記す。対訳書ではない学習書もあるが、史料としての価値を考え除外していない。とくに明記がない限り、国立国会図書館近代デジタルライブラリーでオンライン閲覧のできる図書である<sup>(註9)</sup>。

### 1) 明治20年6月 「(英和対訳) 西洋落語」(A Comical Book)

牛山良介(鶴堂)編訳 佐藤乙三郎(出版人、東京) 30銭

(形態) 81頁+10頁(付録); 18cm

福澤「開口笑話」以前に確認された唯一の対訳笑話集。英語学習を意図して編集された書物ではない。頁左右二段組で、左に英文、右に縦組の和訳を配置する。全80話を収録し、「落語」ということで「第一席」と「話」ではなく「席」を使う。なぞなぞも含まれている。語注はないが、一部に簡

単な解説がある。出典の記載のある話とない話があり、「团团珍聞」掲載の話も再録している。漢文による序文があり、目次はない。「附録 Appendix」として50のことわざ、格言、金言の対訳が巻末にある。出版社名はないが、佐藤乙三郎の名で出版された本は複数ある。この本は明治34年に「西洋落噺」として青木嵩山堂から再版が出版される。明治23年に「西洋落噺」として大阪の濱本伊三郎が出版した版が神戸大学付属図書館住田文庫に所蔵されている。著者は不詳。近代デジタルライブラリー未所収。国会図書館にマイクロフィッシュがある。

2) 明治31年10月 「英和快話篇」 (Anglo-Japanese Conundrums, Witty Sayings) 後藤薫、島野好平著 神戸書店(東京) 20銭  
(形態) 70頁 ; 19cm

福沢「開口笑話」以降、最初に確認できた類書だが笑話類ではなく、「此書に載せたものは英語に所謂Conundrum, Enigma, Charadeの類なり」、つまり「なぞなぞ」形式の質問と答えの形式を200話収める。すべて対訳で、語注、答えについての解説が適宜添えられる。出典の記載はない。「凡例」には「此書はもと英語を充分に解するもの、ために編せしもの」とある。語注等については、同じく凡例で「此書原文のみにて解し難き点は特に説明を附せりされども多く読者の解し得べしと編者の考へたるものには説明を附せず」と述べている。当時貴族院議員で、森有礼文相下で教科書編纂、東京師範学校校長などを歴任した伊藤修二による「序」が添えられる。伊藤は近代音楽教育、吃音教育に貢献し、教育勅語の普及にも努めた国家主義教育者であり、そのような人物の一文としても興味深い。表紙では、後藤は「米国文学士」、島野は「神田中学校教員」となっている。

3) 明治32年4月 「(受験必携) 英文和訳五千題 第一巻」  
(Gems of the Queen's English) 磯辺弥一郎編 国民英学会出版局(東京)  
値段未記載 (形態) 94頁 ; 19cm

明治期にハイレベルの民間の英語学校として著名であった国民英学会発行の「中外英字新聞」掲載の記事、その他雑誌、書籍などからの英文の抜粋集。受験用だが、近世の英文を代表する文を品詞別に例文を掲載する。"Chapter IX Facts and Fun"に合計84のことわざと笑話類が混在する。英文のみで、語注、解説はない。出典の記載はない。「輪読」用に編集したと「緒言」にある。編者の磯辺は国民英学会の主催者で、明治、大正期を代表する民間の英学者。

4) 明治33年11月 「英文読本」(Kinkodo's English Reader)

宮井安吉，花輪虎太郎著 金港堂（東京）四巻：45銭 五巻：55銭  
（形態）全5冊；各20cm

四巻に2話、五巻に3話の"anecdotes"を収める。いずれも英文のみ。英語による語注がある。出典が明記されている。翌年に再訂2版を出版する。タイトルのように、英語講読の読本で、笑話に限定した学習書ではない。2巻にまたがるが、この時期の読本で5話のanecdotesは多い方であろう。表紙には、宮井は「陸軍砲工学校教授」、花輪は「高等商業学校教授」となっている。

5) 明治34年8月 「(英和对訳) 笑話集」(Gems of Wit and Humour)

勝俣銓吉郎編 ABC出版社（東京） 18銭 （形態） 136頁；13cm

福沢の「開口笑話」以降最初の西欧笑話による学習書。193話の笑話の対訳。序文、目次はない。各話に出典が明記されている。一部に語注があり、内容に関する註が適宜添えられる。同社出版物の広告には、この書は「娯楽の間に通俗英語を研究し得べし」とある。勝俣は明治30年から明治34年4月までジャパン・タイムス社に勤務。同年4月から東京府立四中教諭心得。

- 6) 明治35年6月 「(対訳) かるくちばなし」(Pleasant Story / Pleasantries)  
堀越岩松編 岡崎屋(東京) 20銭 (形態) 92頁; 19cm  
46話を掲載。訳注のみで、訳文はない。出典の記載はない。本書の半分  
以上は最終話「アリババ及び一奴婢のために殺されたる四十人の盗賊の話」  
が占める。序文はない。著者は鹿児島県立第二中学校教諭。
- 7) 明治35年7月 「英文逸話集」(Anecdotes) (The A.B.C. Series No.4)  
勝俣銓吉郎編 ABC出版社(東京) 18銭 (形態) 140頁+図版; 14cm  
anecdotes (逸話) を中心に75話。語注のみで訳文はない。出典の記載は  
ない。序文、目次はない。
- 8) 明治36年3月 「英文謎々集」(The English Riddles, Enigmas and Conundrums)  
竹村修編 六六社(東京) 10銭 (形態) 34頁; 14cm  
なぞなぞ集。conundrumsは34、puzzlesは7、historical enigmasは2、  
transpositionは22を収める。conundrumsの一部に語訳註があるが、訳文はな  
い。出典の記載はない。序文はない。笑話集ではないが、笑いの要素を含  
むなぞなぞやことば遊び類が収められている。著者は他に数冊の書籍を上  
梓しているが、「文学士」の肩書きしかわからない。出版社は「ろけろけし  
や」と読む。
- 9) 明治36年5月 「(対訳詳註) 英語一口噺」(中学英語叢書 第1編)  
(Entertaining Anecdotes and Stories) 中学英語研究会編 宝文館(東京)  
20銭 (形態) 66(本文) +43(訳文) 頁; 19cm  
77話収録。前半に英文を、後半に訳文を掲載する。各英文に比較的詳し  
い語注がある。出典の記載はない。訳文の送りがなはカタカナ表記になっ  
ている。旧制中学学生対象の英語の参考書である。中学英語研究会につい  
ては不詳。

10) 明治36年7月 「(英和对訳) 滑稽笑話集」(Topsy Turvy)

英語世界社記者編 英語世界社(東京) 20銭 (形態) 107頁; 15cm  
挿絵のキャプションを含み150話。前半(第一部)は一部に出典を記載、  
数話に内容に関する添え書きがある。後半(第二部)は出典の記載はなく、  
数話に内容に関する添え書きがある。15)「英和滑稽百話」の序文に、この  
本は高野巽の編集であることが書かれている。

11) 明治36年7月 「外国紳士滑稽実話」(A Foreigner's Blunders in Japan)

F.W.イーストレーキ(Frederick W. Eastlake) 著 金刺書店(東京) 30銭  
(形態) 96頁+図版; 15cm

19編の逸話。外国人である著者が日本で犯した失敗談。和文を先に、英  
文を後に掲載する体裁を取る。語註はない。過去に雑誌、新聞に連載した  
記事に加筆、さらに書き下ろし文を加える。巻末の書籍広告には、「… 外  
国の紳士が我国の言葉に熟せぬ為に、様々な間違を起した実際談を和文英  
訳にしたのである、所が其の間違が自然と面白い滑稽談になっている、日  
課の暇冬の夜長に聞いて御覧遊ばせ顔を解き腹をかかへらるる中に和文英  
訳の神髓を知らるること多の架空な会話書を見らるる比では無い」(原文マ  
マ)とある。著者は「博言博士」として多数の英語学習書類を残している。  
国民英学会、日本英学院、正則英語学校など民間の英語学校の設立に関わ  
り、明治期の英語教育に多大な影響を残した。明治38年病没。

12) 明治36年8月 「西洋謎々集(附数学的智慧解き)」

(A Collection of Riddles, Conundrums, and Puzzles) イーストレーキ編  
喜内芳樹訳註 金刺書店(東京) 30銭 (形態) 122頁; 15cm

「一般の謎々」280、「韻文の謎々」13、「数学的智慧解き」28を収める。出  
典の記載はない。適宜簡単な語註が添えられ、「一般の謎々」末に補註が13  
句分ある。訳文はない。巻末の書籍広告には、この書の「効用」として「(一)  
各種問答の訳に止まらず一々註を附して語意と解方を訳し、熟語も一々之

を説明したれば、娯楽を慾にして不識不知の間に英語の実力を発達せしめ  
(二) 殊に謎の解意は、熟語を熟語と見ると、之を別々に解するにあること甚だ多く、従ふて熟語に通ずる利多く … (四) 友人小集の際茶談の資とせば智を闘はし兼て英語研磨に最も妙也法のたるべく、英語研究者の最も珍とすべきものなりとす」とある。

13) 明治36年8月 「英文茶番」(外国語研究叢書第四篇)

イーストレキ著 鍾美堂(東京) 18銭 (形態) 107頁; 18cm

西欧笑話類そのままではなく、イーストレキによる書き下ろしと思われる、日本を舞台にした笑話を集めた読本。第1部「独誦」7話で、第6話までは英文の読み物、第7話は電話でのやり取りだが話し手一人の登場による笑話。語注はあるが、訳文ない。第2部「対話」17話で、二人から四人の人物の対話形式の笑話。語注はなく訳文のみ添えられる。

14) 明治36年9月 「ぼんと初等会話編」(Mr.George M.Bunt's Best Primary

Conversations) ジョージ・バント著、蜂屋可秀訳 宝文館(東京)

25銭 (形態) 125頁; 19cm

笑話的内容の会話100レッスンを収める。一部は日本を舞台にした対話で、書き下ろしと判断できる。西洋笑話の類をそのまま用いていると思われる対話もある。語注、解説、出典の明記はない。バントは当時神戸在住で、英語学校Phonetic Night School主催、兵庫県警の英語教師を兼務。訳者の蜂屋は三高教員。

15) 明治37年3月 「(斬新奇抜)英和滑稽百話(井ツチイ教授序、ユーモ

ー博士編)」(A Hundred Bon-mots) 高野巽訳 小川尚栄堂(東京)

20銭 (形態) 130頁; 15cm

100話収録。対訳のみで語注はないが、1行程度の内容に関する添え書きのある話がいづらかある。出典の明記はない。この頃の高野は英語世界編



集主任である。

16) 明治37年3月 「Select Anecdotes for Conversation and Composition」

北島亘、北島リリアン著 三省堂（東京） 35銭

（形態）2(序文) + 3(目次) + 140頁；四六判

本体に和書名はなく、奥付に「アネクトーツ奥付」と小さく書かれているが、和書名か未詳。65の笑話、逸話に、それぞれ「Questions for Conversation」(英文で4問から10問)、「作文」(和文英訳で3題程度)、「Notes」(英語による語注)がつく。最後に問題のない英文を2話収録。出典の記載はない。解答はなく、教室用英語教科書の可能性がある。北島亘はミードヴィル神学校を卒業後、アレゲニイ大学でPhDを取得し明治26年に帰朝。詳しい経歴がわからないが、高等教育機関での英語教師の職には就いていないらしい。明治30年秋から日本銀行に勤務し、同じ頃入行した馬場孤蝶と懇意にした。PREFACEには、和文問題作成に関わったらしい馬場への謝辞が記されている。執筆当時も日銀在職中であった。後に日本ロータリークラブの設立に関与し、英文のニューズレターの編集を担当、海外でKittyとして広く知られ、在野の実業家として活躍した。リリアン夫人は、当時は国民英学会の講師。近代デジタルライブラリー未所収。

17) 明治38年6月 「英語倶楽部」(ABC CLUB) 三浦理編

有朋堂（東京） 28銭 （形態）120頁；18cm

101頁から「Amusement Corner (娯楽)」で、言葉あそび、パズル、なぞなどを含んで15話の英文読み物がある。語注がつき、一部に解説がある。訳文はない。前半は「教育勅語」の対訳、「君が代」の英訳、「(日露戦争)宣戦詔勅」の対訳、「制露日記」、「広瀬中佐の絶筆」などを収めて、当時の時代背景を反映した内容が43頁まで続く。その後「日本五大御伽話」、「学窓日記」と註釈付き読み物となる。「Amusement Corner」以外はほぼ出典の記載がある。序文はない。三浦は他にも書籍を上梓しているが、詳細不詳。

18) 明治38年12月 「日英新会話」(The Ideal Guide to a Knowledge of English)

ジョージ・バント、小林杖吉著 田中宋栄堂(大阪) 40銭

(形態) 335頁; 15cm

「第四篇 雑題(一) 諷刺的! 諧謔的!! 教訓的!!!」に西欧笑話と、書き下ろしと思われる対話と笑話を合計45話掲載。語注、解説はない。出典の記載はない。

19) 明治39年4月 「英文佳句類集」(Treasury of Select English Sentences and

Passages No.1) 村田祐治、野村雄介編 興文社(東京) 34銭

(形態) 124頁; 19cm

名文、格言、ことわざ、など英文を600を集め、4章に分割、さらに慣用語、文体などによって分類している。訳文、語注、解説は一切ない。出典は大半に記載されている。"Part I"の"Absence of Mind"に4話、"Conundrums"に23話、"Practical Joke"に3話、"Part IV"の"Figure of Speech"に、"Pun or Play upon Words"を11話と"Parody"を4話収める。序文はない。村田は一高教授。野村は不詳。

20) 明治39年8月 「Tell me (英和対訳) ?テル, ミー」

英語攻究会(Eigokokukwai)編 西村寅次郎(発行) 東雲堂書店、集文館書店(発売) 20銭5厘 (形態) 102頁; 16cm

本書は一種のひとり占いの本である。巻末「附録 英和対訳笑話集(The Ridiculous Stories)」に笑話が7話収録されている。対訳文のみで、語注などはない。出典の記載はない。序文は占いの方法についての説明のみで、笑話集についての言及はない。笑話集の序文はなく、目次が付けられている。邦文タイトルの冒頭には「?」がある。英語攻究会は不詳。

21) 明治39年11月 「米国一口噺」 国木田哲夫(国木田独歩)編

独歩社(東京) 15銭 (形態) 53頁; 18cm

92話収録。英文タイトルはない。序文に「江湖若し歓迎せば更に第二巻、第三巻を公にしても可い」とあるが、独歩社の倒産により実現できなかった。出典の記載はない。語注、解説は一切ない。独歩が編集した「上等ポンチ」（独歩社刊）には、創刊号から第四編までStoryettes「おどけ噺」と題した英文対訳の頁を毎号1ページずつ設け、全部で11話を紹介している（出典の記載、訳注なし）。本書と重なっている笑話はない。「上等ポンチ」第五編（最終号）の広告には、「世界第一の滑稽好きなる米国人最近の一口噺を英和对訳したる袖珍美本なり。訳語頗る穩当、英文研究者も米国風の滑稽風刺の妙を味ひ得ると同時に語学を習得す得べし」とある。

22) 明治40年7月 「哄笑十八番」 (The "Rising Generation" Series No.1)

(Eighteen Humorous Pieces) 英語青年社編 熊本謙二郎訳註

有朋堂（東京） 30銭 （形態）159頁＋函版；19cm

逸話18話収録。(23)「西洋柳樽」巻末の本書広告に「好評嘖々第四版出づ」とある。各頁下に詳しい語注、解説が付せられる。出典の記載はない。熊本は学習院教授。

23) 明治40年11月 「西洋柳樽」(The "Rising Generation" Series No.2)

(Life's Little Dramas) 英語青年社編 勝俣銓吉郎訳註 有朋堂（東京）

25銭 （形態）134頁；19cm

217話収録。一部に出典の記載がある。一部に語注があり、内容に関する註が適宜添えられる。目次はない。勝俣は明治39年から早稲田大学講師として教壇に立っている。

24) 明治40年12月 「英語五拾日間速成」 西垣堯則編

啓成社（東京）、前川書店（大阪）共同刊行 60銭

（形態）263頁；19cm

第四十八日「滑稽笑話」(Topsy Turvy)に5話収録。笑話には語注、解説は

ない。カタカナ発音がふられている。出典の記載はない。本書は、タイトルのように50日間で英語を速習しようとする意図で編集されている。著者不詳。

25) 明治41年3月 「滑稽日英お笑草」(Anglo-Japanese Amusing Stories)

津軽純夫著 求光閣(東京) 20銭 (形態) 87頁; 18cm

33話収録。序文、目次はない。数話に語注と内容に関する註が添えられている。出典の記載はない。著者は、明治36年出版の他書の肩書きに、「哲学館、国民英学会、京北中学講師」とある。

26) 明治42年11月 「(英和对訳) 譚叢」(A Treasury of Famous Stories)

増田藤之助選、訳註 京文堂(東京) 45銭

(形態) 84頁(和訳) + 95頁(英文); 19cm

30の短編と「附録 笑箋(八則)(WIT AND HUMOUR)」を収める対訳読本。8話の笑話類には、IからIIIにはタイトル、語注がつけられ、IVからVIIにはタイトルも註もなく、VIIIはタイトルはないが註が付けられている。序文はない。著者は当時早稲田大学教授。国民英学会講師時代に勝俣銓吉郎を教えた。

27) 明治43年10月 「英文自修叢書 第三編」

(A Juvenile Home Reading Series) 村田祐治訳註 昭文堂(東京) 10銭

(形態) 61頁; 17cm

第三編は「A Little World of Wit and Humour」で、35の滑稽笑話、逸話類を収める。訳と語注があり、一部に簡単な話の解説が付けられている。英文表紙タイトルは「A JUYENLE HOME READING SERIES」で、1頁では「A Juvenile Home Reading Series」とJUYENLEが正しい綴りとなっている。出典の記載、目次、序文はない。

28) 明治43年11月 「会話作文応用自在 英文暗記法」

(How to Memorize English) 本多孝一著 英語研究社(東京) 25銭  
(形態) 87頁; 19cm

「緒論 暗記の必要」では、実用英語、会話作文に熟達するには、会話なり作文の材料を頭脳に「ウンと詰め込む」ことが緊急に必要であり、good Englishつまり「癖のない、下品でない、気取らぬ、容易な、当世普通に使われる」英語を覚えることで、このような英語を自由に使えるなら「真に立派な英学者」になれるという。一日に一章を暗記し、この本のgood English storiesをすべて暗記すれば、英語の進歩は驚くべきもので、会話作文への応用もしらずしらず、やすやすとできるようになるという。著者が高等師範在学中に、Prof. Leonardから毎日good Englishの暗記を迫られ、それが今大変役立っていることに着想を得ているという。40の笑話を収めるが、「笑話」であることについての言及はない。目次が付けられ、語注がある。出典の記載はない。著者は、他の書籍では、「東京高等師範卒業、同英語研究科修了、県立諸中学校歴任」とあるが不詳。

29) 明治44年5月 「笑草」(A Bouquet of Smiles)

吉田湖東(与三郎)著 岡崎屋書店(東京) 35銭  
(形態) 190頁; 19cm

219話収録。語注、内容に関する註が適宜ある。出典の記載はない。著者は「マスター、オブ、アーツ」の肩書きがあるが不詳。岡崎屋書店は多数の英語学習書、外国語書、英語辞書などを明治期に編集、出版している。

30) 明治44年7月 「(訳註) 英文落語選」(Tall Tales and Funny Fables)

大橋栄三著 三省堂書店(東京) 20銭 (形態) 146ページ; 15cm

「落語」はいわゆる芸能の「落語」ではなく、笑話を意味する。章立て目次のみで詳細な内容目次はない。全4部構成、各章扉にも笑話があり合計111話。脚注で適宜語注、解説が付せられる。各章扉の笑話にも解説が付く。

出典の記載はない。著者不詳。

<未確認書>

[1] 「譯註英文駄洒落集」 大橋榮三著 村井知至関 三省堂書店  
明治44年刊。古書店目録に掲載。

[2] 「滑稽英和会話」 イーストレーキ著 金刺書店 35銭  
12) 「西洋謎々集」の巻末広告に掲載。

[3] 「Anecdotal Reader」 勝俣銓吉郎編 ABC出版社(東京) 30銭  
7) 「英文逸話集」の広告による。150話収録の記述がある。

### 3 時代的背景と対訳笑話集の出版

明治31年の「英和快話篇」はなぞなぞを扱っているので別として、明治25年以後明治34年までの約10年間に出版された対訳笑話集は現段階では確認できておらず、明治34年に勝俣が出版した「笑話集」を明治後期の同類書の先駆けと断定することはできない。勝俣が序文を添えていないため、彼がこの年に笑話集を発刊した意図も明確ではない<sup>(註10)</sup>。しかし、明治30年代という時代を考えると、この時期に勝俣が笑話集を編集し、以後相次いで同類の書が出版される背景が見えてくる。

明治30年代は、日本が近代国家として完成する時期であった。明治27年7月に日英通商航海条約が調印され、不平等条約改正の第一歩を踏んだ。翌年から日清戦争が始まり、明治37年の日露戦争開戦まで、この10年は日本の「産業革命」期に当たる。「産業革命の進行は、日本の社会に、ホワイトカラーのインテリ・サラリーマンと呼ばれる新しい中産階級を生み出したが、これ以後、中等・高等教育は彼らの後継者を数多く送り出してゆくことになる。」<sup>(註11)</sup>

新たに生み出された中産階級の「インテリ」的側面が英語学習を欲する。また、明治27年、井上毅文相が英語教育以外は国語(日本語)を用いて教授することを指令し、日清戦争の勝利も重なって、時代も英語ブームを盛り上げる。明治28年の高等師範学校の卒業式で、西園寺公望は「わが国が西洋諸大国に伍して行くためには、教育をさかんにし、科学の応用に努めなければならない。それには英語教育に力を注ぐべきで、そのためには生徒の負担の上から、国文科授業の全廃、又は時間縮小を行ってよい。」と述べた<sup>(註12)</sup>。

明治28年4月、高等師範学校に英語専修科を設置、31年の第1回卒業生6人であった。32年4月に本科英語部が設置されるが、師範学校が明治5年に設立されてから28年後のことになる。明治26年に中学校は73校、女学校は0校であり、明治36年には中学校268校、女学校91校までに増加する<sup>(註13)</sup>。師範学校の「専修科」は教員不足の際の臨時設置課程で毎年の募集ではなく、明治33年の第2回卒業生40人、36年の第3回卒業生35人、37年の第4回卒業生50人、39年の第5回卒業生22人であった<sup>(註14)</sup>。

明治32年には、実業学校・高等女学校令、私立学校令、明治36年には専門学校令が敷かれ、教育制度が確立していく。並行して、明治32年には高等商業学校附属外国語学校が新設の東京外国語学校となり英語部が復活し、明治35年には広島高等師範学校が設立され、設立当初から本科英語部が組み込まれるなど、官立の高等教育機関での英語教授の場が確立される。また、高等師範附属中学校は明治31年から外部募集を始め、入試に英語を課し、大正10年まで英語入試が続けられる<sup>(註15)</sup>。

明治33年には津田梅子の女子英学塾も創立され、女性への英語教育も普及する。

明治30年に「外国語学雑誌」、「英語世界」という英語学習雑誌が創刊され、明治31年に「青年」(のち「英語青年」)、32年頃に「新英語」、34年に「英学新報」、36年に「英文新誌」と次々に英語学習雑誌が発刊される。<sup>(註16)</sup>

このような状況下<sup>(註17)</sup>、英語教育界でも種々の議論があり、いわゆる

practical Englishというものの必要性が求められたことは高梨の著作などで論じられている。明治36年の「英語一口噺」の巻末にある「はしがき」は、その事情を反映している。

「実用英語が必要である。普通英語が出来なくてはならぬとは、近頃人のやかましくいふことであるが、これは至極尤もなことで、いかに高尚な文が読めても、いかに複雑な文法上の理解が解つても、日用文が綴れず、日常の簡単な会話が出来ないやうでは、誰が見ても英語研究の方針を誤ったものと言はなければならぬ。それでは何を研究すれば此の方針に副ふことが出来やうか。文法の大意に通ずることは無論必要であらう。新聞や普通文が楽に読めるやうになることは猶更必要であらう。併し実用といふ点から見れば会話作文の練習が極めて必要である。今日英語研究の攻撃が盛んであるが其の目指す所は主としてこの会話作文の練習を怠って居る点にあると思はれる。所でこれを学校で教へることは現在の事情では余程困難であるし、又この研究は学ぶ者の方で十分練習すべきものである。本書は其の同伴とならうといふ目的で世の中に出たのであつて、集た話は総べて七十七、中には日常の会話あり、滑稽談あり、逸話あり、又古事来歴とでもいふべきものがあるが、皆今日所謂普通英語であつて、且つ記事が趣味に富んで居ることは、編者の信ずる所である。一々詳註を添へ、巻末には其の訳文を附けて置いた。又必要と認めた所には、文法上の説明や、類文例を加へた。何分本書は百頁位にとの注文であるから、十分に材料を多くすることの出来ないのは遺憾であるが、其のかほりには註釈は可成周密にして初歩の方にも困難のないやうに注意をした。…」

こうして、出版界は新機軸として笑話を利用した英語学習書の出版を目指したのであろう。勝侯の「笑話集」以降に刊行された書物のいずれにも、福沢や勝侯の名前も書名も出てこない。序文があるものはもちろん、序文のない本でも、広告などに見る他の出版物から判断して、どの書も英語学習が目的であり、福沢、勝侯に倣っていることは見てとれる<sup>(註18)</sup>。



残念ながら、それぞれの発行部数、反響などはまったくわからない。音声が簡単に利用できない時代に、こうした学習書がどれだけ「実用英語」の参考となったのか。また、「英語学習書」そのものの価値はどれだけあるのか。疑問点はまだ多くある。語注、訳注についても、英語学習書としての視点からの検討が必要だが、これもまた今後の課題である。

#### 4 明治後半の「笑い」と対訳笑話集

この時期に英語の対訳笑話集が編集された背景には、もう一点、この時期の日本の「笑い」の状況があり、この状況が対訳笑話集の出版に影響を与えたと考えられる。

この時期、大衆の笑いの宝庫である落語が、東京では著しく衰退している。明治20年代に繁昌を極めた東京落語も、明治30年代に大物噺家が相次いで他界し、不景気や寄席と落語家自身の放漫な態度もあり、大衆離れを起こした<sup>(註19)</sup>。「郵便報知新聞」明治22年1月6日号に掲載された「府下諸芸人総数（昨年十二月末時点）によると、落語家は男659人、女30人だが、明治39年11月の「文芸倶楽部」所載の「流行の浪花節」に記載された芸人数では、落語家は約200人と激減している<sup>(註20)</sup>。

明治20年代の東京落語は人情噺、怪談噺を真打ちとし、笑話を軽く扱っていた。従来噺では客を集められなくなった落語界は、新しい基軸として笑話的要素を含む上方落語を取り入れることで、完全な衰退を免れることになる。少なくとも明治30年代の東京には、新しい笑いを求める雰囲気が強かった。明治20年代後半から30年代にかけて、イギリス生まれの落語家快樂亭ブラックが、西欧笑話を元にした笑話で全盛期を迎えていたことも、当時の笑いの状況の一部といえる<sup>(註21)</sup>。

英語ブーム、実用英語指向、だけではなく、時代は新しい「笑い」をも欲していた。

## 5 笑話集の笑話と笑い

対訳笑話集の話が、どのように日本の笑いの中に取り入れられたか、比較文学的にも笑い学的にも検討されなければならない問題である。対訳笑話集に扱われたすべての西洋笑話の詳しい分析を論じなければならないが、紙量の都合もあり、本稿では概観を紹介し、詳解あるいは別個の分析は稿を新たに起こしたい。

対訳笑話集の英文は平易なものが多く、内容は今日でも笑うことができるような話が多い。編者は難解な話をさけ、日本人でも理解しやすい話を選んだのであろう。次の話は現代の落語のまくらでも使える話であり、時代、文化を超えた笑いの普遍性をよく示している。

Little Charlie :- "Papa, will you buy me a drum?"

Fond father :- "Ah! but, my boy, you will disturb me very much if I do."

Charlie :- "Oh, no, papa; I won't drum except when you're asleep."

小さきチャーレー「お父さん、私に大鼓を買って呉れませんか」

好いお父さん「うむ、買ってやるのは可いだが、己れを困らせるだう」

チャーレー「何あに、お父さんが寝ている時しか鳴らさないから」

(「米国一口噺」)<sup>(註22)</sup>

Often the Case

Little Elmer - Papa, what is a critic?

Professor Broadhead - A critic, my son, is a person who couldn't have done it himself.

よくある奴

倅の英太郎 『阿父さん、批評家てのは何です』

父(大学教授)『批評家といふのは自分がやつたら巧く出来ないことを彼是言ふ人のことサ』(「西洋柳樽」)

Bag of Gold (soliloquizing): - These joke writers think it very funny to make inanimate objects speak; but it is simply ridiculous. Of course, it is different with me, for money talks.

財布の独言 「この滑稽記者は命のない物に口を利かしてそれで面白いことだと思つて居るが馬鹿氣た事だ。勿論、僕は例外だ、金が物を言ふといふから」(「西洋柳樽」)

特徴的な翻訳は、人名の訳出である。福沢の「開口笑話」にも人名に工夫が見られるが、人名を日本人風に訳している場合が多い。Often the Case ではLittle Elmerが「悴の英太郎」と訳されている。英語人名の音に似た人名を利用する場合や、職業などから連想した人名にする場合などがある。

#### AN EASY GUESS

Hojack - "Who was the best man at the wedding of Mr.Meeker and the Widow Swayback?"

Tomdik - "The Widow Swayback."

直ぐ推諒せらる

北条—三池氏と諏訪未亡人との結婚の媒介者は誰でしたらうか、  
富田—誰でもない、諏訪未亡人自さ、 (「英和滑稽百話」)

Cab Tout. - "I say, Bill, lend me sixpence?"

Cabby: "I can't; but I can lend you fourpence."

Cab Tout. - "All right. Then you'll owe me twopence."

平六： ヤイ平の字六片貸せ

平七： 六片はないが四片貸そう

平六： よし々々それで二片貸しとしておこう (「笑話集」)

前者は英語の音から連想される日本人名を利用している。後者は人力車引きという職業から連想される人名であろう。「開口笑話」では、actorを団十郎とし、tragedyを「春日局」と訳している例がある。こうした訳は、む

しろ一種の「翻案」調になるが、読者の理解を助け、読者に「笑い」を起こさせる役割を十分に果たしている。これらの笑話がどのような形で日本の小咄として定着したか、興味深い問題である(註<sup>23</sup>)。

欧米的な発想、欧米的な事物が描かれる話も多い。対訳笑話集が英語の理解だけではなく、当時の多文化理解にも果たした役割は大きかったと考えられる。

"Pa, is a man's wife called his better half?"

"Yes, my son."

"Then each of Mr.Roberts's three wives would be a better sixth, wouldn't she?"

「お父さん、おかみさんの事をベターハーフといふの？」

「坊や、そうだよ」

「じや六角の叔父さんは三人おかみさんがあるから一人はベターシイキスといふのでしょうか？」

[Better halfは妻の意にて二人合して一人となるなれば各自は半分にてその中にて好き半分といふ意なり。上記の滑稽を算式に立つれば $1/2 \div 3 = 1/6$ となる] (「笑話集」)

"Do you promise if we are married you'll give up smoking?" "Yes"

"And drinking and cardplaying?" "Yes"

"And you will give up your club?" "Yes"

"Are there any other foolish things you'll give up, too?" "Yes, I'll give up marrying."

「あなた夫婦になりましたら屹度煙草をおやめになりますか」

「ハイやめます」

「而して酒呑もトランプ遊も」 「やめます」

「それからクラブ行きもやめになりますか」 「ハイやめます」

「尚其の他の馬鹿々しい事で御やめになることがありますか」

「ハイ夫婦になることをやめませうよ」 (「英語五拾日間速成」)

Benham - The good die young.

Mrs. Benham - Then there is no danger of my outliving you.

辯造：善い人は夭死（わかじに）するよ。

辯造の妻君：それじやあ私があなたより長いきする様な事は先づありませんね（「滑稽日英お笑草」）

ベターハーフという夫婦平等を示す概念、男性がいても簡単に夫婦になることを「馬鹿々しい事」とすること、また、辯造の妻君の毒舌、など、「家」や「世間」に縛られていた人々には、生々しい外国の姿として理解されたことだろう。

エスニックジョークも紹介されているが、ステレオタイプとしてのイメージは与えられていない。

Two Irishmen out in Africa took refuge under the bed-clothes from the mosquitoes. Presently one put his head out cautiously to reconnoitre. When he spied a fire-fly, says he, "I say,

brother, it's all up with us; the creatures are searching for us with lanterns."

亜佛利加へ出稼に行った二人の愛蘭人、蚊で堪らないので敷布を引ッ被っておりました。間もなく一人がそうッと敷布から首を出して四方を見廻はすと蛍が一疋飛んで居たので驚いて云ひました。「オイ兄弟分愈よ運の盡きだせ、蚊の奴め今度は提灯をつけて探しにうせた。」

（「英語落語選」）

「英国や愛蘭土には蛍と云ふものが居ないので、これを提灯をつけた蚊だと思ったのだ」という脚注が添えられているが、アイルランド人の愚かさを笑うという、この話の意図はこの脚注からでは理解できない。全体として、他民族を笑う話は少ない。

編訳者全員の経歴はわかっていない。北島亘を除けば、日本人はほぼ全員が留学経験もなく、海外への渡航経験もない。勝俣は高等教育機関で英語の教育を正規に受けてはいない。Japan Timesの英文ライターであり、英

米人との接触は多かっただろうが、生身の、一般の英米人を、現地で広く理解することはなかった。他の編訳者も同じような立場にあった。編訳者たちには他民族のステレオタイプを描き出すことに主眼はなく、また描き出すこともできなかった。

日本人とは異なる西欧人とりわけ英米人の発想や言動を紹介し、多文化に触れさせるという点で、これらの対訳笑話集は大きな役割を果たしている。同時に、英米の笑話を日本人も笑うことができ、日本人もまた英米人とほぼ同じ笑いのレベルであることを理解させた点では、文化の異質性ではなく共通性を教示するという役割をも果たしている。

## 5 結語

これまでの英語教育史研究でも、英学史研究でも、対訳笑話集のような学習書はほとんど無視されてきた。それはまた、「笑い」というものを低く見る研究態度と深く関わっていると考えられる。「笑い」の研究においては、「笑わせる」こと、「笑う」ことに重点が置かれ、「何を笑ったか」という視点はほとんど顧みられていない。笑い学研究の泰斗である日本笑い学会の編集になる「笑い文献目録」でも、2008年8月版まで明治期のほとんどの対訳笑話集が収録されていなかった。

本稿で明らかにした明治後期の対訳笑話集は、これまでの英学史研究、英語教育研究史が見落としてきた新しい一面を探り出す可能性が高く、同時に、笑いの側面からの多文化理解的研究、あるいは比較文学的研究という視点から、日本人の笑い観、ユーモア観に別角度からの考察を求めることにもなるだろう。

さらに、明治以降の教育が「笑い」という思想をどのように取り込んでいくか、という大きな問題を考える上でも、明治後期の対訳笑話集が果たした役割を検討する必要がある。

また、訳文の多くは言文一致体で書かれており、たとえば明治20年出版

の「西洋落語」と言文一致体との影響関係なども、新しい視点からの研究となるだろう。

出版部数、実際の販売部数、増刷回数、読者の反響、各地図書館での購入購入状況と利用状況、各種の学校での利用の有無など、明らかにしなければならない問題点は多く、一方現在では追求できない可能性が高い問題も数多くある。しかし、対訳笑話集を明治後期の一過性の出版部としてのみ扱うことができないことは言を待たない<sup>(註24)</sup>。

### (資料)

参考として主な学習書の和文の序文を付記する。

#### 2) 「英和快話篇」(「序」伊藤修二)

「凡そ国民の機智の精酸は凝りてその俚諺滑稽の中に在るを見るとは或る賢き人の言にもありきと覚えしが余も又常に然かく信ずるものなり。此頃我郷友後藤君英和快話篇といふ書を持ち来りて余に一言を序せよといふ余繙きてこれを一閲するに英語の謎又は滑稽話の類を集めて和訳を施し我邦人をして容易く難解の語句を解せしめ併せて英米人の機智の伏在する所を発見し以て其快味を悟らしめんとするに在るが如し善哉君がこの挙あること今や時恰も改正条約実施の期に近づき彼我の交際上互に相知るの必要あるのみならず進で思想界の奥底までも穿ち入り其の餘蘊を究め盡さんには此書の如き手引草の助によるふしも多かるべし記して江湖君子の批判をまつ」(以上原文ママ)

#### 10) 「(英和対訳) 滑稽笑話集」

「本書は、鬱散娯楽の傍ら、英文の読書力を養成する目的にて、海外の諸新聞雑誌類より抜粋し、嘗て英語世界に掲載せる趣味に富める短話、滑稽画等を蒐集したるものなり。本書の前半は姫路中学教諭深澤由次郎氏の撰

及び和訳に関り、後半は英語世界編集人の撰及び和訳に関する。」

12) 「西洋謎々集（附数学的智慧解き）」

「此の書は英語の洒落を、うまい日本語に訳して了ふか、又は、意識と註釈の二で、其の妙味を日本人の読者に解せしめやうとするので、大膽一余り大膽過ぎた企であるが。訳し又は註するに就ては、喜内氏が多大の骨折を以て、誠に敬服すべき方法で其の職分を盡くされたので、予は之を編纂するに当て、乗り気のしない所でなく、寧ろ愉快とする所であった。予は詐りなく正直に云て、此書を一般英語学生、殊に滑稽を愛するの士に推薦するのである。」

15) 「(斬新奇抜) 英和滑稽百話」

「本書は、英米発刊の幾多の新聞から、趣味に富める滑稽一口噺を、一粒擇りに撰んで、和訳を添へたのです。中学程度に於ける英語学生が、本書を読んで、鬱散娯楽の間に、知らず識らず、読書力を養ふことを得ば、本書編輯の目的は達したのです。さきにTopsy-Turvyを編したのも同じ主意でした。」

21) 「米国一口噺」

「米国程滑稽を喜ぶ国はない、而して此小冊子は米国に於ける最近の笑談を集めたものである。此書の目的は二つある、一つは所謂米国一口噺の一端を紹介する事と、一つは英語の活ける俗語を知るに不便なる今の教科書の欠点の一部を補ふ事である、江湖若し歓迎せば更に第二巻、第三巻を公にしても可い」

22) 「哄笑十八番」

（「此書を読むとき」）「原文を先にして訳註を後にするも 訳註を後にして原文を先にするも そは唯読者の意に任さん。然れども意義既に明瞭した



るの後 更に原文を通読する事一再なるは 訳者の切に希望する所也。蓋し読者は英語を学ぶものにして 訳者も亦英語を教へんと欲する耳。假令訳文絶妙註釈精細を極むとも 畢竟堂に昇るの階梯 室に入るの廊廡たるに過ぎず。己の為に利なる 此忠言に従ふ事を肯ぜざるの徒は 初めより此書を繙かざるに如かず。」

### 23) 「西洋柳樽」

〔小引〕『西洋柳樽』は骨休めの福音（ゴスペル オヴ リラクセーション）を説きて所謂奮闘的生涯（ストレニューアス ライフ）の根底に培はんとの大抱負を持つ 生まれたるものなり。」

（原文ママ。「持つ」と「生まれた」の間は一字あき。）

### 29) 「笑草」

「米国人は長幻を論せず全体に頓智とか洒落とかに長じて居る事は世界で有名なものである其米国人の快活なる談話の妙味を知り且つ味ふ事は英語に活用上又は彼等との交際上幾分か利益があるだらうと思ふて厚顔にもこの書を出す事にした」

### 30) 「訳註 英文落語選」

「英米の落語にして我国に詳解せられたるもの、未だ多くあるを聞かず。茲に於て彼地の寄席芝居等にて間々耳にせる落語を選び集め小冊子として江湖に示すこととせり。無論人口に膾炙せる佳話にして選に洩れたるもの亦多かる可し。他日の増補を期す。本書題して『英文落語選』と云ふ。若し幸に読者の頤をととき、傍ら日用英語学修の一助とならば、本書の目的足れりと謂つ可し。然しながら尚ほ編者の愆には面白ろ可笑しく本書を読みもてゆく中に、社会各般の事相に対する英米人の感想をも、併せて玩味せられたし。各噺の終に訳文を添へたり。然れども元これ大意を訳出せるものに過ぎねば、脚注により原文を熟読し、噺の落或は要点の了解し得ざる

時にのみ、これを参照せられむことを望む。」

[註]

- (1) 本稿は、日本笑い学会第15回総会、研究発表会（2008年7月12、13日、京都外国語大学）での口頭発表を元に加筆したものである。発表の質疑応答に際して織田正吉氏、長島平洋氏に貴重な発言、助言をいただいた。発表の要旨は「日本笑い学会新聞第84号」6頁に掲載されている。北島亘、リアン夫妻については、御令孫の永島孝氏（一橋大学名誉教授）から貴重な情報、資料をいただいた。各氏に記して感謝申し上げる。
- (2) 福沢諭吉閱、男一太郎訳「英和对訳 開口笑話 全壹冊」、明治25年9月9日出版、編集兼出版者（東京府平民）福沢太郎、発売元 交詢社。復刻は「福沢諭吉の開口笑話 明治の英和对訳ジョーク集」、飯沢匡(現代語訳)、1986、富山房。「開口笑話」の原本は、国立国会図書館近代デジタルライブラリー蔵書にはない。
- (3) 長島平洋、「日本のジョーク：福沢諭吉と『開口笑話』と尋常小学校読本」、『笑い学研究』第7号、2000、日本笑い学会、p.19。「開口笑話」の詳解については本稿の目的ではないので、この論文を参照されたい。
- (4) 註(3)参照。
- (5) ロン・スチュアート、「福沢の『開口笑話』における教授法およびステレオタイプ表象」、『多元文化』第5号、2005、名古屋大学大学院国際文化研究科国際多元文化専攻。
- (6) 本文では、和文は縦書き印刷になっている。ルビは原文のままで、活字の一部を現代表記に訂正して引用した。全誌の確認はできていないが、不定期に明治38年頃まで掲載が続いている。語注、訳註類はない。
- (7) 日本人を対象とする英和对訳で、外国人の日本語学習に有益となるという発想は極めて珍しい。B.H.チェンパレンの"A Handbook of Colloquial Japanese"と"A Romanized Japanese Reader"には、落語的な笑話が読解練習用に収録されているが、このような外国人向けの日本語学習書に掲載された笑話類の考察も取り組まれていない。
- (8) 本稿で紹介した各学習書にはjoke、ジョークという用語は使用されていない。内容としてはjokeもあり、one linerあるいはriddleのような、短い笑いの英文もあり、anecdoteのような笑いの逸話もあり、多岐に渡る。「ジョーク」では語義を限定することになってしまうため、本稿では笑いの要素を含む文を「笑話」という用語で一括する。
- (9) 「形態」は国立国会図書館近代デジタルライブラリーの書誌情報による。英語以外の対訳笑話はドイツ語の1冊のみを確認している。  
明治36年8月 「独和对訳滑稽百話」 樋口市太郎（仁尻凸八）編  
金刺芳流堂（東京）
- (10) 明治5年生まれ勝俣は、正規の高等教育機関で英語を習得したのではなく、

ミッションスクール横浜英和学校と国民英学会で学んだ。彼は昭和14年に「英和活用大辞典」を刊行する。昭和33年の新版の序文では、「その内容はわたしが三十年ばかりの間に集めた十二万のコロケーションを収録したもので、「その文献は主として、いわゆるpopular Englishに属するものであって、文学に属するというより、むしろジャーナリズムに属するものである。というのは、わたしの目標は美辞麗句を集めるのではなく、また特殊の難句を集めることでもなく、達意を手とした英文の姿を集成しようという考えであったからである。」と述べている。ジャーナリストとして欧米の新聞、雑誌類には必ず笑話が掲載され、笑話が日常生活の一部であり、その英語は日常語の一部であることを知っている彼は、難解な英文法や詩的言語で書かれる文学の英語ではなく、実用英語の学習での笑話理解の必要性を悟っていたと考えられる。彼が福沢の「開口笑話」をいつ読んだかはわからないが、明治39年に「和英名家訳例集」を編集・刊行し、その中に福沢諭吉の一文を含めており、「開口笑話」も学生時代か、Japan Times社の英文ライター時代か、いずれかの時代に読んでいるはずである。彼は明治35年に「俚談金言集」をABC出版から刊行している。対訳で999句所収。笑話だけではなく、日常的に使用される英語に幅広い視点を持っていたことがよくわかる。二つの笑話集の英文と「英和活用大辞典」の例文の関係については、対照確認を行う必要があるだろう。

- (11) 高梨健吉、「ある英文教室の100年（東京高等師範学校、東京文理大学、東京教育大学）」、1978、大修館書店、p.35.
- (12) 同p.37.
- (13) 同p.35.
- (14) 同p.36.
- (15) 同p.102。英語ブーム一色というわけではなく、明治34年に国粋団体の玄洋社の内田良平らが政治結社「黒龍会」を結成、同年上海に中東同文書院が創設されるなど、国粋主義の動きも盛んであった。
- (16) 今後、明治期の英語関連雑誌に掲載された笑話類の確認も必要である。勝俣銓吉郎が編集していた「The Rising Generation 青年」（ジャパン・タイムス社発行）では、第3巻第1号（明治33年1月10日発行）から、「萬花鏡」（Kaleidoscope）として英和对訳の笑話コーナーの連載が始まった。一部の話に語注、解説、出典の明記がある。数年はほぼ毎号の掲載であり、その後不定期連載となる。第1回には「小孔を通じて見る所の景物轉一轉變を盡し化を極む。而も面白きは一なり。これ萬花鏡（Kaleidoscope）の名を冒する所以なり。」と書かれている。ここに掲載された笑話と勝俣の著作に掲載された笑話の異動も今後検討の必要がある。また、新英語社が明治32年代に編集発行していた「新英語」にも西欧笑話が掲載されている。古書店で明治32年11月25日発行の第五号を入手し、この号では、「滑稽文集」として「前号の訳文」を8話掲載、「滑稽新題（訳文は次号に載す）」として7話の笑話を掲載している。語注、解説はない。出典も記載がない。英学史関連の参考図書には「新英語」に関する情報は見あたらず、全巻を完全に所蔵している図書館もないようである。12号まで発行して廃刊になったらいい。「新英語」の発行所は表

紙では新英語社となっているが、裏表紙では発行所は岡崎屋書店と記され、両方は同じ住所になっている。

- (17) 過剰な英語ブームに対して、小林清親は明治31年刊の画集「教育いろは談話」で「盗人を見て縄を編ぶ」をたとえに英語ブームを揶揄している（小林清親著・画「教育いろは談話」、明治31年、発行人武川清吉）。21葉の一枚刷の連作風刺画の1枚で、大きな丸眼鏡に背広の男性が、椅子に座り机に向かい、右手に洋書、左手にペンを持っている。机には4冊の洋書と書きかけの紙、インク壺がある。頭から煙が立ち上っている。画面右手に下女が座ってひかえ、左手を頭に置き、口を大きく開けて、驚いた様子をしている。次のような会話が書かれている。

下女「アラマア旦那様、貴公（あなた）どう成さいました。急に毛唐人（けとうじん）の着物を着て、椅子なんぞに腰を掛けて、オヤオヤ大きな眼鏡ですわねえ、本当にどう成すったのだろう、お頭（つむり）から煙（けむ）を出して汗を垂らしてマア、気でもお狂（ちが）ひ生すったのか知ら、夫（それ）とも昔し何とかいふ人は夢で放蝶（てふてふ）になったと云ふ話があるから眼鏡の大きな処を見ると、蜻蛉に成た夢でも見て居らっしゃるのか知ら」

旦那「ノウノウ、メーイドサーウアト、あなた下女あります。何事も知りません。ジャパン内地雑居あります。外国の人タクサン来ます。洋学知らない、ペケされます。金儲かりません。私し洋学稽古して置きます。亜米利加の人よろしい。独逸の人よろしい。英吉利の人よろしい。話し出来ます。金タクサン儲かります。私し今から準備（したく）します。あなた笑ひます。ペケペケ」

下女「ヲヤマア異人の仮声（こわいろ）がお上手ですわね」

旦那「仮声ありません。あなたペケ、内地雑居知りません。私し金儲かる準備します」

下女「へえさうで御坐いますか。然（そ）して貴公、何を成さるので御坐います」

旦那「何をする、まだ分りません」

- (18) 明治36年発行の「英文謎々集」は、編著書、出版社からは出版目的を推察しかねるが、内容から判断すれば、やはり英語学習が目的であろう。
- (19) 暉峻康隆、「落語の年輪」、1978、講談社、参照。
- (20) 兵藤裕己、「<声>の国民国家・日本」、NHKブックス、2000、日本放送出版協会、p.53、p.185。
- (21) 興津要、「青い眼の落語家快樂亭ブラックの世界」、『落語家一懐かしき人たち』、旺文社文庫、1986、旺文社、参照。
- (22) 「困らせるだう」は原文ママ。
- (23) 対訳ではないが、明治後期には翻訳の笑話集が出版されている。確認できているものは以下の通り。

[1] 明治37年(1904)10月 「西洋笑府」 和田万吉編 庄野宗之助画

吉川弘文館（東京） 40銭（形態）322+53頁；19cm

扉には「西洋はなし」とある。217話収録。出典の記載はない。総ルビ。語注

がある。編者は当時東京帝国大学助教授、同図書館長。序文で教育における笑いの効果を指摘している。

- [2] 明治39年(1906)9月 「西洋一口噺」 荒木江村編 呑洋堂  
(東京) 15銭 (形態) 87頁; 15cm

106話収録。出典の記載なし。総ルビ。挿絵のキャプションはドイツ語で、ドイツの笑話の翻訳と判断できる。

- [3] 明治43年(1910)12月 「西洋一笑一話」 和田亘子(マンシ)編  
文会堂(東京) 60銭 (形態) 234頁; 19cm

277話収録。出典の記載なし。総ルビ。編者は[1]の和田万吉。

- [4] 明治43年(1910)1月 「閑日月」 護竹軒主人編 振文館(大阪)  
10銭 (形態) 98頁; 19cm

「西洋笑話」の章に14話収録。出典の記載なし。この本自体が笑話集で、全体総ルビ。

「西洋笑話」序文で、和田は教育における笑いの効果を述べている。長島は「開口笑話」と国定教科書の関連を指摘しているが、明治期の教育における笑いの扱いについても今後検討が必要である。また、欧米ばかりではなく、アジア各国の笑話が明治期にどのように紹介されたかを確認する作業も残されている。中国の笑話の翻訳書を一冊確認している。

- [1] 明治44年(1911)4月 「支那笑話集」 岡本正文編訳 文求堂(東京)

- (24) 言文一致体との影響関係だけではなく、日本近代文学作品への影響関係についても今後考察を広げる必要があるだろう。たとえば、国木田独步の「上等ボンチ」、「米国一口噺」の編集、発行の仕事、掲載された西欧笑話と彼の小説との影響関係も考えなければならない問題である。また、現在同時に明治期の英語学習書に扱われた西洋ことわざについても文献調査を進めており、ことわざ学会第20回ことわざフォーラム(2008年11月15日、明治大学駿河台校舎)で「明治期の英語学習書とことわざ」と題して口頭発表を行った。西洋笑話、西洋ことわざなど、従来軽視されてきたジャンルであるが、当時の社会への影響は決して小さくはない。英学史、英語教育史はもちろん、比較文学、比較文化あるいは多文化理解の領域でも、ほとんど研究が行われていないジャンルだけに今後の研究の発展が望まれる。